

特別支援教育実践マニュアル

< 7 >

～ 情緒の調整 と 社会性 ～

特別支援教育実践マニュアル< 7 >をお届けします。

人は、自らの情緒を整えることで、適応的な行動をとります。

例えば、興味のないことでも儀礼的に関心を示したり、逆に好奇心を抑えて相手との程よい距離を保ったりします。あるいは、みんなと一緒にしゃいで一体感を味わったかと思うと、気持ちを静めて協調的に振舞ったりします。

多くの子は、こうした情緒の調整を、就学する前から自然に行っています。しかし、発達に遅れや偏りがある子の中には、情緒の調整が難しい子が多く存在します。

今回は、そうした子どもたちの中でも、特に「自閉傾向のある子」への理解の仕方とサポートの具体例を特集します。

こんなタイプの子、クラスにいませんか？

事例 17

尊大な態度をとりながら、すぐ被害者意識を持つ子

事例 18

いつも受身でおとなしく、ときおり自暴自棄になる子

事例 19

人のミスを大声で指摘し、一方的に話しかける子

【事例 17】 尊大な態度をとりながら、すぐ被害者意識を持つ子

小学校 2 年生の T さんは、大人びた言葉使いで理屈を言い、「おい、それはキミの義務でしょ！」などと横柄な態度をとります。ところが自信のない場面ではすぐ一杯一杯になり、「みんなボクが失敗すればいいと思ってるんだ！」など被害感を抱き、取り乱します。何かの拍子に数ヵ月も前のことを思い出し、泣くことがあります。

T さんの不安

< 自己愛的な不安 >

T さんは、「できない自分」をイメージして不安になります。T さんのように自閉傾向のある子は、人に慰められて気持ちを立て直すことが苦手です。自分が失敗するということは、それですべてが終わりになるくらい不安なことなのです。

< 他者から侵食される不安 >

T さんは、人からの働きかけを過剰に感じ取ります。少し押されただけで、悪意ある攻撃として捉えます。少し否定されただけでも、全否定されたような被害感を抱きます。尊大に振舞うのは、自己防衛的な気持ちからなのです。

< 否定的なメッセージに対する不安 >

T さんは、クラス全体に向けられた注意事項を、すべて自分だけに向けられた注意として受けてしまいます。例えば、先生が全員にチャイムが鳴り終わるまでに着席しないことを注意すると、「だって、時計がないから遠くにいたら無理だよ！」と反発します。

< フラッシュバックによる不安 >

T さんは、半年や一年も前のことを、今、目の前で起きたことのように突然思い出してしまいます。フラッシュバックです。その思いに突き動かされるように、「あいつが～したんだ！」と言っては、仕返ししようとすることもあります。

T さんへのサポート

< 理屈を封じ込めずに受け止める >

理屈が得意な T さんは、理屈をこねることで安心感を得ています。理屈で理屈を封じ込めるような指導は、T さんを混乱させるだけです。休み時間を利用し、「先生は T さんの言うこと、わかるよ。～なんだね」と伝えます。

< 家庭との連絡を小まめにする >

子どもが被害者意識に傾く場合、保護者は帰宅したわが子から被害感の強い報告を受け続けることで学校不信に陥りがちです。学校からの小まめな連絡が必要です。否定的な場面ではなく、子どもの良い評価を家庭と学校とで共有し、それぞれが伝聞方式で褒めましょう。「お母さんから(先生から)聞いたけど、～したんだって?すごいね」と。

< 困り具合を小まめに確認する >

不安で気持ちがすぐに一杯一杯になる T さん。机間支援などを通して T さんの困り具合を確認しつつ授業を進めます。具体的に細かな指示をして、大丈夫感を与えます。

< 静かな場所でクールダウンさせる >

取り乱したときは、大人が付き添って保健室や相談室へ行き、クールダウンさせます。

【事例18】 いつも受身でおとなしく、ときおり自暴自棄になる子

中学校1年生のUさんは、とても繊細で情感豊かな作文を書きます。しかし、普段は表情が乏しく、話しかけられても無愛想なまま突っ立っています。相手が嫌な思いをしないような儀礼的な会話ができません。普段は友だちにからかわれても顔色ひとつ変えませんが、ときおり自暴自棄になり、友だちに罵声を浴びせます。

Uさんの不安

<他者からどう見られているかが分からない不安>

Uさんは、自分の態度が友だちからどう見られているのか、直感的に判断するのが苦手です。それで、どのような態度を取れば良いのか分からずに突っ立っているだけになってしまいます。さらに、無表情なUさんは、にらんでいるように人から誤解されがちです。その誤解が余計にUさんを不安にさせます。

<相手が2人以上いる場合に増す不安>

Uさんは、会話のニュアンスが読み取れないので、相手が2人以上いる場合、自分から話しかけることができません。小学校3~4年生の頃から、みんな仲良しグループで遊ぶようになり、Uさんはずっと孤立したままです。

<イライラを制御できない不安>

Uさんは、集団の中にいる緊張感から疲れが溜まり、些細なことでイライラします。そして、イライラしてはいけないという意識から、二重に苦しむことになります。



Uさんへのサポート

<班活動に配慮する>

Uさんは、共同作業が多い班活動では強いストレスを感じます。班構成は、穏やかな気質のメンバーになるよう配慮します。また、記録係など、Uさんの得意な書き言葉を使って参加できるようにしましょう。

<筆談を活用する>

自閉傾向のある子は、物を介して対話すると安心します。休み時間を利用し、先生が隣の席の子も誘って筆談したり、時にはメモ用紙で伝言したりしましょう。

<「はっきりと」「分かりやすく」話しかける>

「はっきりと」といっても、大きな声ではありません。声の調子だけで怒られていると思い、言われている内容を理解できなくなる場合があります。できるだけ穏やかに話しかけましょう。「分かりやすく」とは、話の全体のイメージが伝わることです。例えば、「2つ、話があります。1つは、~のことです」といった具合です。

<じれてきたら体を動かす>

授業中でもイライラしてじれてきているのが分かったら、席や教室を離れることができる用事を頼んで、気分転換を計ります。

【事例 19】 人のミスを大声で指摘し、一方的に話しかける子

小学校5年生のWさんは、相手のミスを大声で指摘します。嫌な雰囲気になっても、「本当のことを言っただけだよ」と意に介しません。好きな話題になると、相手をうんざりさせるほど一方的に話しかけます。しかし、Wさんが戸惑うことがあります。どこを掃除すればよいのか、何を作文に書けばよいのか、分からないのです。

Wさんの不安

<全体と部分の関係がつかめない不安>

Wさんには、ちょっとした失敗(部分)を気軽に修正するということが、自他共に許せません。すべて(全体)が台無しになるくらいの一大事なのです。

<相手のペースに巻き込まれる不安>

Wさんは、人のペースで話が進むのがとても不安です。それでイニシアティブをとろうと躍起になって、結果的に自分勝手に喋ってしまいます。

<はっきりとした枠がないことからくる不安>

どこからやり始めれば良いのか、どこまですれば良いのか、Wさんにとっては自由度が大きいということは、すなわち曖昧さが増すということであり、不安なのです。

Wさんへのサポート

<認め合う価値をクラス全体に広める>

まずは、間違いを指摘された子の回答に対し、先生が「さんは、～として考えたのですね」などと、頭から否定しない返し方をします。次に、大声でミスを指摘するWさんも否定せず、「Wさん、大切なことですね。声に出さず、メモして後で先生に下さい」などと導きます。



<一方的な話題に大人が付き合う>

電車やアニメなど、Wさんの一方的な会話に付き合えるのはやはり大人です。休み時間などを利用し、1日に1回は決まった時間に先生から話題を持ちかけましょう。

<情報を絞り込む>

自由度の高い場面設定で迷うWさんには、情報を絞り込むようなヒントを与えます。例えば、文章の要約をするときの目の付け所や、絵を描き始める箇所などを教えます。

まなびサポート事業

教育研究センター 美浜北小学校内 381-7960・7961

まなびサポート相談室 見明川中学校内 390-5204